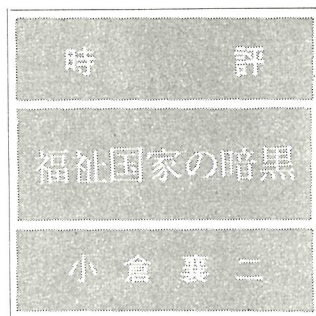




私たちの周辺で福祉国家というコトバがきわめて無難作に使われるようになった。それも、政府の政策として、国民生活の未来図やイメージとして強制されようとしている。福祉国家とさえいえばバラ色の幻想に彩られるような現状維持ムードが巧みに造成されている。福祉国家にもダ

ークサイドがある。福祉国家の本質にさまざまな暗黒をうみだすなかがある。日本と英国ではまるで状況が違うが、福祉国家の典型としてわが国で受容されている英国における問題をとらえてみたい。風土論になるが、秋から冬にかけての英国は私たちには想像できぬくらい陰湿な状況になる。私がロンドンに着いたのは一月であったが機上からみる巨大都市ロンドンはうつすらと流れる霧の底にナトリウム燈の橙黄色の帯をめぐらしていた。英国で dull という表現がある。煙霧に長い年月いためつけられ煤けた石づみの部厚い壁、いつも冷く鈍い反射をもった舗石の道。それらに象徴されるような歴史や伝統の重圧も、それだけでは無い。福祉国家の政策としての社会保障Ⅱ社会サービス、完全雇傭、あるいは、混合経済体制（石炭産業国有化など）も深くかかわりあっている。売春問題などは一つの暗い断面だ。霧の都の娼婦たちと呼んだ人もあるが戦

後にかぎっても、ロンドンにはヨーロッパで、有名な街娼の多い都市であった。法の改正によって街の表面からは消えた。阿姆斯特ダムやハンブルグのような、飾り窓の女々として一定の区画にいてもない。ほとんどがコールガールの形態になっている。ソーホーといった歓楽街、パディントン地区のようなターミナルと盛り場、中々下級住宅の混在する不安定な地域にある雑貨店の表口などによく目立つ掲示用の枠がある。それに色とりどりのカードにコールガールの電話番号をしるしてはりつけてあり、セミヌードの写真やごていねいに黒人はおことわりという註までついたのがある。政府刊行の資料にも売春問題のぼう大な分析がなされているが福祉国家状況に深く根ざす構造的なものだ。人口の都市集中が経済成長政策によって加速される。都市の巨大化は住宅問題をはじめとして矛盾と緊張をたかめる。ニュータウン住宅計画も人口と産業の分散、再開発の手段である。女子労働力、とくに若い労働力がロンドンに集積する。最低賃金制度もあって日々の生活にはそれほど窮迫はない。ゆたかな社会々は欠乏から欲求へと人間を推しやる。ロンドンには欲望への刺激がいっぱいある。若い女子の賃金では欲求不満が増大する。この面からも肉体の提供による売春へのルートが敷かれていく。政府資料では、さらに重大な要素として社会生活上の孤独と疎隔をあげている。英国の階層別の断絶もきびしいし、職場の状況も合理化されて、人間的な接触も冷たい。若い女子が巨大都市ロンドンで経験する孤独は地方都市の共同体的親愛とは全く異質のものである。その不安と寂寥からも売春に陥る。そこで不安は解消し、不特定の男性の需要にこたえることによって、自分自身の存在

―確認と売春の必要性の正当化を行なうのだといわれている。プロヒューモ事件とかミス・キーラのスキヤンダルの基盤もこの状況にある。コールガール、キーラの背後には駐英ソビエト大使館付武官とかウォード博士といった正体不明の人物が交錯しマクミラン前首相の地位を揺がし、英国の上流社会の頹廃を露呈したといわれた。また少年犯罪のカーブも鋭い上昇線を描いている。「地球の皮を剥ぐ」というショッキングな記録映画があったが、そのなかで、ロンドン郊外での淫らな黒ミサの集会を扱っていた。狂気にちかい異常な世界である。英国の保守党は福祉国家を *responsible society* と自讃する。資本主義の「変容と譲歩」によって到達した終着駅とみる。労働党は、富の偏在や不当な特権の横行を批難して *inreproachable society* (無責任をわまる社会) という。労働党にしても、たしかに福祉国家を中間駅として社会主義への志向を綱領としてもっているものの現実の政策展開のきめ手をもたない。duff と功利主義的な日常の安定ムードのなかに多くの労働者たちも埋没する。福祉国家はほう大な中間層を温存し、体制への受益意識を育成していく。性への刺激、狂気、犯罪それらはこのような現象的にみれば「ゆりかごから墓場まで」のエスカレーターの生存安定のみせかけも強烈な違和感で切り裂いているのである。ソーホーの歓楽街に黒を主調にした小さなコーヒーストップがあった。全体が墓室というこしらえで、机は棺桶型、灰皿はドクロ、壁には骸骨の踊りが描かれている。若い勤労者風の男女がじつと薄明に肩をよせあって低い声で話している。何時間もそうしている。青少年のクラブ活動、そこにもマンネリズムがあったがとにかくその明るさと全く対照的な

青春があった。福祉国家にも二百万人以上の国家扶助に依存する貧困者があり、とくに老人の生活保障の困難が増加している。イーストエンドやラムベス地区の長屋には全く福祉サービスの網の目からこぼれ落ちた人々の悲惨が目についた。訪問活動の強化によって保護がはかられているけれども限界がみえている。一方で医療保健サービスのるように国民医療のすぐれた制度の著しい効果をあげている領域もある。わが国では高度経済成長政策の採用とともに福祉国家という表現が体制側から伝播されるシンボルとして使用され出した。英国においては労働党の政策決定に対する実績や保守党の国民生活の保障についての良識が期待できる。私たちの周辺の福祉国家状況はもつとむきだしに経済成長＝資本ベースで推進されてきた。自民党政府が高度福祉国家をとなえて、その唯一の政策としての社会保障にしても、国民の生活保障要求からみれば全く分裂的で給付格差の著しい社会保険と低劣な基準で有名な公的扶助、機能不全の社会福祉事業がなんらの統合的原則もなしに存在するのみである。英国と日本の風土と人間の相違は大きい。しかし英国の「暗黒」はさらに拡大・深化したかたちで私たちの現実である。福祉国家の基礎条件に価する政策は不在であり、そのきびしい検討や論議もない。日々の新聞紙面、TV画面には交通殺人をはじめとして「豊富の中の残酷」が私たちに訴えかけてくる。英国の現実に学びつつ福祉国家幻想にとらわれることなく国民の生活要求や基本的権利の確保の立場からの発言を続けることが当面の政治・経済批判の主題だと思う。

(文学部教授・社会問題)